

連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力を育む国語科学習指導の工夫

— 実生活で触れるテキストを評価する学習活動を設定した単元づくりを通して —

廿日市市立佐伯中学校 上本 美智子

研究の要約

本研究は、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力を育む学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究における連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力について、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確かめたり、書き手の意図を捉えたりする能力とした。この能力を高めるために、実生活で触れるテキストを評価する学習活動を行うことが有効であると考えた。そこで、第3学年の生徒を対象に、新聞記事や広告を評価することを通して、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むスキルを習得させる単元づくりを行った。その結果、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力に高まりが見られた。このことから、実生活で触れるテキストを評価する学習活動を取り入れることは、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力を高めるために有効であるといえる。

キーワード：連続型テキストと非連続型テキスト 関連付ける 評価する

I 連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むことの課題

平成25年度全国学力・学習状況調査中学校国語（以下、「全国学力」とする。）において、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む問題の広島県の正答率は64.8%であった。また、平成25年度「基礎・基本」定着状況調査において、図表と文章とを関連させながら読み、根拠に基づいて自分の考えをまとめる問題の通過率は47.5%であった。

さらに、「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取り組みが期待される内容のまとめ（中学校編）」（平成24年）では、中学校国語「読むこと」の課題として、「資料の図が、文章のどの部分を補足しているかについて文章中から抜き出す」¹⁾ことが指摘されている。また、「平成25年度『基礎・基本』定着状況調査報告書」（平成26年）には、資料のどの部分に着目したのかを明らかにすることに課題があると指摘されており、先述の問題においても、設問中に設定された書き手の意図に沿って、図表と文章とを関連付けることに課題があったと考えられる。

これらのことから、本県では、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力に課題があり、この能力の育成が求められているといえる。

II 連続型テキストと非連続型テキスト

とを関連付けて読む能力について

1 連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力とは

(1) 連続型テキストと非連続型テキストとは

「PISA調査（読解力）に関する参考資料」（平成17年）によると、連続型テキストとは、「文と段落から構成された物語、解説、記述、議論・説得、指示、文章または記録など」²⁾のことである。非連続型テキストとは、「データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式など」³⁾のことである。

先行研究を見ると、これらと同様の定義で用いられているといえるため、本研究においても、連続型テキストと非連続型テキストという表現を用いる。

(2) 連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力とは

連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力とは、どのような能力であるかを明らかにするために、学力調査問題を分析した。

平成25年度「全国学力」B1「説明的な文章を読む（いろはかるた）」では、図表などを用いた説明的な文章を読む際に、図と文章との関係を捉えさせる問題が出題されている。この問題では、図表と文章とを結び付け、対応関係を確かめる力が求められている。

同B3「資料を参考に、漢字について考える」では、設定された人物が新聞記事のどの部分に注目してグラフにまとめたのかを考え、その箇所がどのような疑問を解決する参考になるかを答えさせる問題が出題されている。また、平成25年度「基礎・基本」定着状況調査中学校国語五では、イベントを実施するために、設定された人物が3つの資料からどのような思考を経てイベント案内を決定したのかを考え、説明させる問題が出題されている。これら2つの問題では、図表と文章との対応を確かめた上で、設定された人物の意図を捉える力が求められている。

次に、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けることについて、全5社の教科書においてどのように扱われているかを調査し、表1のようにまとめた。その結果、「読むこと」の領域においては、連続型テキストと非連続型テキストとの結び付きを確かめながら読んだり、用いられている非連続型テキストの効果を考えさせたりする内容が設定されていることが分かった。

表1 教科書の「読むこと」領域の学習内容における連続型テキストと非連続型テキストとの関連付け

学年	学習内容	教科書会社
1	図と内容に対応させながら読む。	4社
	図表の効果を考える。	1社
	筆者の着眼点を読み取る。	1社
2	対応関係を確認、論じられている順序や絵画の読み解き方を確認する。	1社
	図表と記述とを対応させて内容を読み取る。	1社
	挿絵と漫画を比べ、共通点と相違点を考える。	1社
3	図を活用しながら読み、図の効果を考える。	1社
	文章中の写真などの効果を考える。	1社

以上のことから、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力とは、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認めたり、非連続型テキストを用いた書き手の意図を捉えたりする能力と定義する。

2 対応関係を確認めたり、書き手の意図を捉えたりするために必要なスキルとは

連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認めたり、書き手の意図を捉えたりする能力を育むために、どのようなスキルが必要になるか、教科書の学習課題における扱い方を整理した。

全5社の教科書の学習課題に共通していることとして、「本文と図の対応に注意しながら読む」という課題が設定されていることが挙げられる。この学習

課題に取り組むためには、「それぞれのテキストの大体の内容を理解」し、「非連続型テキストの内容が、連続型テキストのどの内容と結び付くのかを探し出し、その内容を確認する」が必要になる。また、3社で「図表と対応する文章を確認しながら、図表にはどんな効果があるか考える」という学習課題が、1社で「図版と本文を読み比べ、論じられている事柄の順序など、筆者の絵画の読み解き方を確認する」という学習課題が設定されている。これらの学習課題に取り組むためには、「非連続型テキストが用いられたことによる効果や書き手がその非連続テキストを用いた理由を考える」ことが求められる。さらに、非連続型テキストのどの部分から課題を捉えたのか、非連続型テキストから読み取れるどんな情報を組み合わせて課題を解決しようと考えたのかなど、「書き手の思考を統括的に捉える」ことも必要になる。

また、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む指導の先行事例(12例)において、対応関係を確認めたり書き手の意図を捉えたりするために設定された学習活動も表2のように分類できる。

表2 先行事例の学習活動

対応関係を確認め	連続型テキストの内容と非連続型テキストの内容の大体を読み取る。	12例
	非連続型テキストの内容が連続型テキストのどの部分と結び付くのかを探し出し、その内容を確認する。	8例
書き手の意図を捉える	非連続型テキストが用いられたことによる効果や書き手がその非連続テキストを用いた理由を考える。	3例
	対応関係を確認め、グラフや図などの論じられている順序や説明に仕方を確認する。	1例

以上のことから、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認めたり、書き手の意図を捉えたりする能力を育むためには、「①連続型テキストの内容と非連続型テキストの内容の大体を読み取るスキル」「②非連続型テキストの内容が連続型テキストのどの部分と結び付くのかを探し出すスキル」「③非連続型テキストが用いられた効果や用いられた理由を考えるスキル」「④書き手の思考を統括的に捉えるスキル」が必要であると考え。先行事例では、書き手の思考を統括的に捉える例は少ないが、書き手の意図は、テキストの一部だけではなく、全体を通して捉えるべきものであり、書き手の思考を統括的に捉えることは部分的な関連付けをテキスト全体の中で統合する重要なスキルであるといえる。連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むため

に必要なスキルを図1のように整理した。

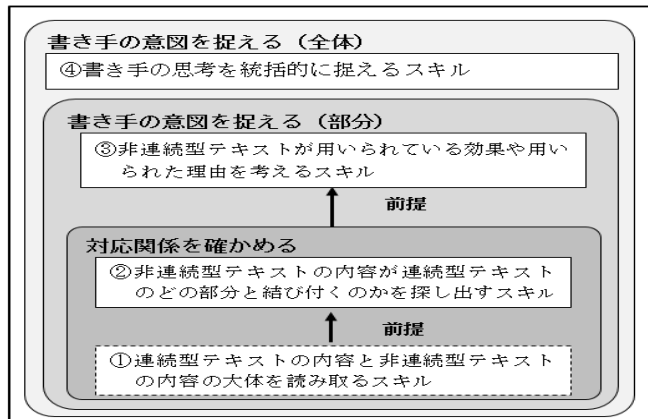


図1 連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むために必要なスキル

図1の①はその他のスキルを支える前提であり、関連付けをする前段階で習得すべきスキルである。②は、③の前提になるスキルである。④は、書き手の意図を統括的に捉えるスキルであり、これらのスキルを育成することで連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力を高めることになる。

Ⅲ 実生活で触れるテキストを評価する学習活動について

1 実生活で触れるテキストの特徴について

実生活で触れるテキストには、連続型テキストと非連続型テキストとが組み合わされているテキストが多く、そうしたテキストでは、それぞれのテキストの作り手が必ずしも同じではないという特徴がある。

連続型テキストと非連続型テキストの作り手が同じ場合には、非連続型テキストの情報の客観性を確かめたり、恣意的に情報が作られたりしていないかどうかを吟味しながら読むことが重要である。連続型テキストと非連続型テキストとの作り手が異なる場合には、それぞれの作り手の意図も異なるため、非連続型テキストの情報と連続型テキストの内容の対応に妥当性があるかどうかを一層慎重に確かめながら読むことが求められる。

したがって、連続型テキストと非連続型テキストとが組み合わされているテキストを関連付けて読む場合には、それぞれのテキストを対象化し、その結び付きを確かめながら連続型テキストの書き手の意図を捉える必要がある。

2 テキストを評価することについて

(1) 評価するとは

連続型テキストと非連続型テキストとが組み合わされているテキストにおいて、それぞれのテキストを対象化し、結び付きを確かめたり書き手の意図を捉えたりするためには、テキストを評価することが有効である。

「評価する」ことについて、高等学校学習指導要領解説国語編（平成22年）では、「文章の構成や展開の有り様や、それが、要旨などを伝えるために果たしている効果などを分析、考察し、その価値を判じることである。」⁴⁾と示されている。

先行研究では、森田信義（平成23年）が、「評価読み」という言葉を用いて、その定義を「書き手の書いている通りに読み取ったもの（ことば・内容、表現方法、論理）を、その妥当性や問題の有無という観点から吟味・評価すること」⁵⁾としている。井上尚美（2007）は、「批判的な読み」という言葉を用いて、「情報の真偽性・妥当性・適合性を一定の基準に基づいて判断し評価できるようにすること」⁶⁾として、「①情報の中身がホントかウソか（真偽性）、②考えの筋道は正しいか正しくないか（妥当性）、③情報はどの程度確かであるか、また、現実と照らし合わせて適当であるか（適合性）」⁷⁾について判断できる能力を付けるものとしている。

森田においても井上においても、テキストを評価する際に、ある視点や基準に基づいて判断・吟味するようにしている。

以上のことから、評価するとは、テキストの内容や表現の仕方について対象化して分析し、その価値や妥当性などを視点に沿って判じることと定義する。

(2) テキストを評価するための視点

次に、どのような視点からテキストを評価しているか、森田信義（平成23年）の「評価読み」⁽¹⁾と井上尚美（2007）の「批判的な読み」⁽²⁾、阿部昇（2003）の「吟味よみ」⁽³⁾におけるそれぞれの視点と、評価することを扱った先行事例の学習指導案（8例）⁽⁴⁾について表3のように整理した。

表3において、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認しながら評価することに関する視点が【A】で示した部分である。書き手の意図を捉えて評価する視点が【B】で示した部分である。

これらのことを踏まえ、本研究における評価の視点を表4のように設定し、この視点に沿って、テキストを分析し、その価値や妥当性などを判じる学習指導を提案する。

表3 「評価読み」「批判的な読み」「吟味よみ」、学習指導案を基に分類した評価の視点

	「評価読み」(森田)	批判的な読み(井上)	吟味よみ(阿部)	学習指導案(8例)
事例の適切さ	○ことがら・内容(教材の内容の要点)【A】	○証拠となる資料・事例は十分に整っているか。【A】【B】	○「事実」と現実との対応を吟味する。 ○「事実」の取捨選択を吟味する。	○行われた調査方法の妥当性 ○取り上げられた「事実」の妥当性 ○エピソードの妥当性 ○連続型テキストと非連続型テキストとの結び付きの妥当性【A】 ○グラフや図、挿絵の効果【B】
表記	○言語表現(重要語句)	○語の用法は明確であるか。	○語彙・表現を吟味する。【B】	○言葉の定義の仕方の妥当性 ○意図的にカタカナ表記にした効果
論展開の適切さ	○言語表現(論理構築、論理把握の指標となる表現) ○論理(文章全体の論理構造) ○論理(「ことがら・内容」相互の関係)【A】【B】	○論の進め方は適切か。【A】【B】	○根拠・解釈・推論を吟味する。【A】【B】 ○ことがら相互・推論相互の不整合を吟味する。 ○裏にある考え方・ねらい・基準を吟味する。【B】	○論の進め方は適切か【A】【B】 ○段落の文章全体で果たしている役割 ○説明の適切さ(不十分さはないか)【B】 ○筆者の思考の流れ【B】

表4 本研究における評価の視点

【A】対応関係を確認する	【B】意図を捉える
○連続型テキストと非連続型テキストとの結び付きの妥当性 ○論の進め方の適切さ(飛躍はないか)	○説明内容の適切さ(不十分さはないか) ○非連続型テキストが用いられた効果や理由 ○論の進め方の適切さ(飛躍はないか) ○文章全体を通して用いられている工夫の吟味(主張との関係)

3 実生活で触れるテキストを用いる意義

本研究では、実生活で触れるテキストを教材として用いる。次にその意義について整理する。

金子守(2013)は、教科書や学力調査の中の文章や図表やグラフなどは、客観的で信頼性のあることが前提となっているが、実生活の中では疑ってかからねばならない場合が少なくない指摘し、発信者にとって不都合なことも、発信者の目的や意図も含めて読み解き、テキストの妥当性を評価しなければならないと述べている⁽⁵⁾。また、井上尚美(2007)も、教科書はあまり批判するような余地はないが、日常生活では欠陥のあるものの方が多く、それらを吟味することにより、子供の批判的思考力も高まると指摘し、生徒が興味をもって学習できる教材としてマスコミを積極的に活用することで、生徒が身近なところから問題を発見し、疑問をもち、それを考える態度を養うことができると述べている⁽⁶⁾。

これらのことから、実生活で触れるテキストを用いることで、生徒に評価することの必要性を感じさせ、言語活動に目的意識や興味・関心をもたせることができると考えられる。また、評価する過程で、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認したり、書き手の意図を捉えたりすることについて

も理解しやすくすることができるといえる。

4 単元構想について

新聞や広告といった実生活で触れることの多いテキストを評価するという言語活動を通して、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力を育むために、図2のような単元を組む。

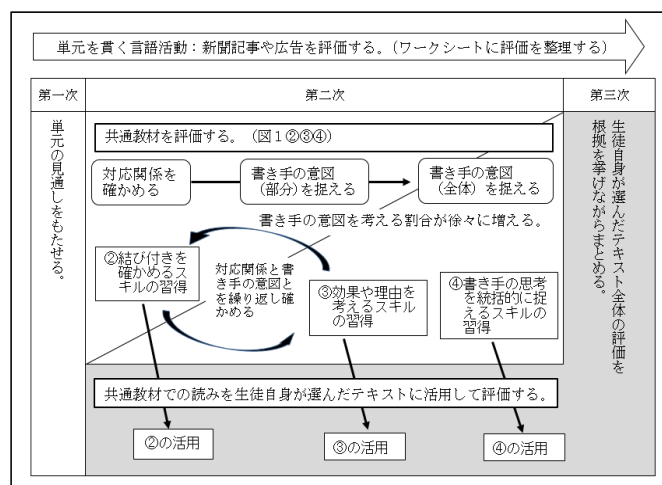


図2 本単元の構想図

単元を貫く言語活動として、新聞記事や広告を評価することを設定する。共通教材(新聞記事)を評価する過程で連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むスキルを習得させ、それを生徒自身が選んだテキスト(新聞記事や広告)に活用して評価させる。本単元では、最終的に書き手の思考を統括的に捉え、吟味することを重視し、ワークシートを使って生徒の評価を整理させる。

第一次では、新聞記事や広告を読んで疑問をもった経験はないかを問いながら、言語活動全体について

て見通しをもたせる。

第二次では、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付ける三つのスキルを育成する。まず、②非連続型テキストの内容が連続型テキストのどの部分と結びつくのかを探し出すスキルを身に付けさせるための指導をし、その結び付きの妥当性や説明の適切さについて評価させる。次に、③非連続型テキストが用いられた効果や用いられた理由を考えるスキルを身に付けさせるための指導をし、それについて評価させる。④書き手の思考を統括的に捉えるスキルを身に付けさせるための指導をし、論の進め方の適切さや書き手の工夫について評価させる。また、50分の授業時間のうち、15分程度を生徒が選んだテキストの評価にあてることで、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むスキルや評価の視点を活用させ、生徒が自ら評価できるようにする。

第三次では、第二次での評価を振り返りながら、生徒が自分の言葉で根拠を挙げてテキスト全体を評価できるようにする。再度、書き手の思考を統括的に捉えて吟味する中で、繰り返し、連続型テキストと非連続型テキストとの対応関係を確認めたり、書き手の意図を捉えようとしたりすることになる。

IV 研究の仮説と検証の視点と方法

1 研究の仮説

実生活で触れるテキストを評価する学習活動を設定すれば、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力が育まれるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表5に示す。

表5 検証の視点と方法	
検証の視点	方法
○連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力が高まったか。	プレテスト ポストテスト 事前アンケート 事後アンケート ワークシート
○実生活で触れるテキストを評価する学習指導や手立てが有効だったか。	

V 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成26年6月25日～平成26年7月9日
- 対 象 所属校第3学年（2学級66人）
- 単元名 新聞記事や広告を評価しよう
- 目 標

新聞記事や広告に書かれている情報について、内容や表現の仕方などの対応関係を確認めたり書き手の意図を捉えたりして評価することができる。

2 指導計画（全7時間）

次	時	主な学習内容	
一	1	・「評価する」ことに対するイメージをもたせ、単元の見通しをもつ。	
二	2	共通教材	生徒が選んだテキスト
		・連続型テキストと非連続型テキストの結び付きを確認めするスキルを習得し、評価する。	・結び付きを確認めするスキルを活用し、評価する。
	3	・書き手の伝えたいことを捉え、非連続型テキストが用いられた効果や理由を考えるスキルを習得し、評価する。	・書き手の伝えたいことを捉え、効果や理由を考えるスキルを活用し、評価する。
		・書き手の伝えたいことに対する工夫を捉えるスキルを習得する。	・書き手の伝えたいことに対する工夫を捉えるスキルを活用し、評価する。
	5	・共通教材で、書き手の伝えたいことに対する工夫を評価し、評価をまとめる。	
三	6	・生徒が選んだテキストで、書き手の伝えたいことに対する工夫を評価する。	
	7	・生徒が選んだテキストの評価をまとめる。	

3 ワークシートについて

共通教材と生徒自身が選んだテキストについて評価させるために、図3に示すワークシートを用いる。

ワークシートには、読み取ったこととそれに対する評価とを対応させるように配置し、テキスト全体に対する評価までを1枚にまとめる。そうすることで、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むために必要なスキルと評価の視点を視覚的に整理させ、根拠のある評価を行えるようにする。

まず、①で、両方に書かれている部分とどちらか一方にだけ書かれている部分について、色を変えて線を引き、内容の一致点を確認させることで結び付きを確認めするスキルを習得させ、②に評価をさせる。次に、書き手の主張を③に書き、④に非連続型テキストの有無による印象の違いや非連続型テキストを用いることでねらったことを考えることを通して、効果や理由を考えるスキルを習得させ、評価させる。このとき、連続型テキストと非連続型テキストの対応関係や書き手の意図を繰り返し確かめさせる。続いて、書き手の主張を効果的に伝えるための工夫を文章全体から捉えさせることを通して、書き手の思考を統括的に捉えるスキルを習得させ、⑤に評価させる。

部分ごとの評価では、④を参考に、同じ事実に基づいていても、書き手の主張や意図によって、記事の書きぶりや工夫が異なることに気付かせ、書き手の主

張に対するよりよい工夫を考えさせる。最後に、⑥にテキスト全体に対する評価をまとめさせる。

①
新聞記事より引用

羽生選手がソチオリンピックで金メダルを獲得するまでの男子フィギュアの挑戦を記事にしたものと歴代の日本人男子選手の順位を一覧にしたもの

②
結び付きの
要領性や内容
説明の適切さ
を評価する。

③
書き手の主張

④
図表を用いる効果と、図表を用いた書き手の意図を捉え、評価する。
標準：歴代の順位一覧を載せることで、分かりやすくなったと、読み手に与える印象、書き手がねらったことを説明し、根拠を挙げて評価している。

⑤
書き手の主張を効果的に伝えるための工夫を捉え、評価する。
標準：羽生選手が金メダルを獲得するまでの男子選手の挑戦を伝えるために工夫（話の進め方や説明の仕方、言葉の選び方など）を捉えて説明し、根拠を挙げて評価している。

⑥
テキスト全体に対する評価をまとめる。
標準：書き手の主張を明らかにし、それを伝えるために工夫を具体的に説明し、根拠を挙げて評価している。また、書き手の主張を伝えるためのよりよい工夫（話の進め方や説明の仕方、表の使い方、言葉の選び方など）を考えている。

部分ごとの評価をするときは、評価の視点に沿って、根拠を挙げて記入する。上段は自分の評価を、下段は他者の評価を加筆する。

図3 ワークシート

VI 研究授業の結果分析と考察

1 連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力は高まったか

連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力について、プレテスト・ポストテストの正答の人数は表6のとおりである。なお、対応関係を確認する設問と意図を捉える設問とは、それぞれ異なる資料を対象とするものである。

表6 プレテスト・ポストテストの正答者の数（66人中）			
		設問	
関係	対応	資料に対応する段落を選ぶ。	60人
		対応関係を説明する。	36人
意図	書き手の	指定された資料について、資料を用いた書き手の意図を捉える。	0人
		自分が選んだ資料について、資料を用いた書き手の意図を捉える。	38人

この結果から、連続型テキストと非連続型テキストを関連付けて読む能力のうち、書き手の意図を捉える能力については高まったといえる。

この変容について、どのような指導が有効であったのかを分析した。プレテスト・ポストテストにおける書き手の意図を捉える設問の解答類型を表7に、結果を表8に示す。

表7 書き手の意図を捉える設問の解答類型	
A評価（正答）	・書き手の主張を捉え、資料の説明とその資料を用いた書き手の意図を説明している。
B評価	・書き手の主張は明記していないが、資料の説明と資料を用いた書き手の意図を説明している。
C1評価	・資料の説明をし、「分かりやすい」などだけ書いている。
C2評価	・資料の説明のみしている。
C3評価	・その他の解答
無解答	・無解答

表8 書き手の意図を捉える設問の結果							
ポスト	A評価	B評価	C1評価	C2評価	C3評価	無解答	計（人）
プレ							
A評価							0
B評価	3				1		4
C1評価	18		1	2	7	2	30
C2評価	5		1		1		7
C3評価	12		1	1	4	2	20
無解答	1	1			2	1	5
計（人）	39	1	3	3	15	5	66

プレテストで、最も多かったのがC1評価の30人であった。この30人のうち、ポストテストでA評価となった18人のワークシートを分析したところ、次の2点において記述の変化がみられた。

1点目は、単元の初めの段階では「図表があるので分かりやすい」とだけ記述していたが、単元の後半では図表があることでどのように分かりやすくなったのかということ具体的に記述するようになった点である。2点目は、単元の初めの段階では書き手の意図を考えることができなかったが、単元の後半では図表を用いることで何をねらったのかという書き手の意図を考えるようになった点である。

これらはともに、テキストを評価する過程で、非連続型テキストが用いられた効果や理由を考えるスキルの指導を通して変化したものである。何が分かりやすくなったのかを確認させたり、資料の有無による読み手の受ける印象の違いを話し合わせたり、書き手は何を伝えるためにこの資料を用いたのかを振り返らせたりする指導が有効であったといえる。

〈単元の初め〉
○表があることで分かりやすい。

〈指導後〉
○いつ、どの大会で、誰が、どんな成績だったかが整理され、分かりやすくなっている。
→多くの人が挑戦したもののなかなか結果が出なかったことを伝え、読み手に苦労を思い出してもらおうとしている。
→「82年目の悲願」を強調し、説得力を増そうとしている。

生徒aの記述の変容

プレテストのC1評価からポストテストでA評価になった生徒aも単元の初めは「表があることで分

- 6 -

かりやすい」とだけ記述していたが、指導後は分かりやすくなったことを具体的に記述したり、表を用いることで書き手が何をねらったのかを考え記述したりすることができるようになっている。

一方、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読む能力のうち、対応関係を確かめる能力については課題が残った。対応関係を確かめるときに、非連続型テキストに付けられたタイトルと同じ言葉を探すだけで、非連続型テキストの内容に目を向けていない生徒もいた。こうした生徒は、ワークシートにおいても、グラフや表の数字と一致する部分だけを文章中から探しており、グラフや表から読み取れる傾向や変化は捉えていなかった。本研究では重点を置かなかったが、連続型テキストと非連続型テキストの内容の大体を読み取るスキルが定着していないことが原因として考えられ、この能力の定着も求められる。

また、書き手の意図を捉える能力についても、ポストテストでは3割程度の生徒がC評価であった。これらの生徒もワークシートの段階では、指導者などから助言を受けて加筆し、書き手の意図を捉えられていた。今後は、書き手が主張と資料をどのように結び付けているかを自力で考えられるようになるまで、効果や理由を考えるスキルの定着を図る必要がある。

2 実生活で触れるテキストを評価する学習指導や手立ては有効であったか

事後アンケートで、非連続型テキストが含まれた新聞記事や広告、インターネットの記事を読むときに、9割以上の生徒が、授業前に比べて、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むスキルを意識しながら読むようになったと回答している。

また、事後アンケートの記述から、生徒は実生活で触れるテキストを評価しながら読むことの必要性に気づき、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付けて読むスキルを意識していることが伺える。

これらのことから、実生活で触れるテキストを教材として扱ったことは有効であったと考える。

- 新聞やニュースを見るときにも主張やそのための工夫や意図について考えて評価し、自分の意見をもちたい。(新車販売に関する新聞記事)
- 広告をよく読んで作り手のツボにはまらないようにしたい。流して読むのではなく、照らし合わせて読みたい。祖母が余計なものを買わないようにしてあげたい。(養毛剤の広告)

事後アンケートの記述(括弧内は生徒が選んだテキスト)

次に、評価をする学習指導や手立てが有効だった

かについて、評価する設問と対応関係を捉える設問との正答状況の関係、評価する設問と意図を捉える設問との正答状況の関係をみたプレテスト・ポストテストにおける解答類型を表9に示す。あわせて、評価する設問と対応関係を説明する設問との正答状況のクロス集計を表10に、評価する設問と意図を捉える設問の正答状況のクロス集計を表11に示す。

表9 評価する設問、対応関係を確かめる設問、意図を捉える設問の解答類型

評価すること	A評価	・書き手の主張を捉え、根拠に基づいて評価している。
	B評価	・書き手の主張は明記していないが、根拠に基づいて評価をしている。
	C評価	・評価はしているが根拠が曖昧である。 ・主張のみを書いている。 ・その他の解答
	無解答	・無解答
対応説明	A評価	・どのような内容に関するアンケート結果なのかを説明している。
	B評価	・グラフタイトルに準じた表現で解答している。 ・「アンケート結果」と解答している。
	C評価	・その他の解答をしている。
意図	意図を捉えることについての解答類型は、表7に同じ。 (C1評価, C2評価, C3評価を合わせてC評価とする)	

表10 評価する設問と対応関係を説明する設問との関係

	対応 評価すること	A評価	B評価	C評価	計(人)
プレテスト	A評価	1	1	6	8
	B評価		1		1
	C評価	10	7	17	34
	無解答	1	7	15	23
	計(人)	12	16	38	66
ポストテスト	A評価	18	2	9	29
	B評価	5	2	3	10
	C評価	11	2	9	22
	無解答	2	1	2	5
	計(人)	36	7	23	66

表11 評価する設問と意図を捉える設問との関係

	意図 評価すること	A評価	B評価	C評価	無解答	計(人)
プレテスト	A評価			8		8
	B評価			1		1
	C評価		4	30		34
	無解答			18	5	23
	計(人)		4	57	5	66
ポストテスト	A評価	22		7		29
	B評価	5		5		10
	C評価	11	1	8	2	22
	無解答	1		1	3	5
	計(人)	39	1	21	5	66

評価する設問と対応関係を説明する設問との正答

状況の関係を見ると、この二つの設問がA評価又はB評価であった生徒は、プレテストでは3人であったが、ポストテストでは27人に増えている。評価する設問と意図を捉える設問との正答状況の関係をを見ると、この二つの設問がA評価又はB評価であった生徒は、プレテストでは0人であったが、ポストテストでは27人に増えている。

この結果から、実生活で触れるテキストを評価する学習活動を通して、評価する視点を持ち、評価できるようになると、対応関係を説明できるようになったり、意図を捉えられようになったりした生徒が増えていることが分かる。

特に、評価に際してよりよい工夫を考えられるようになった生徒は、書き手の意図を捉えられるようになっている。これは、書き手の主張にとってより効果的な工夫は何かということを考えることを通して、テキストに表れている書き手の意図をより丁寧に確かめるようにするためだと考えられる。

(前略) 広告(健康食品)には2カ所グラフが用いられビタミンEと食物繊維の多さを説明しているのに、グラフの形が異なっている。書き手は同じ内容を繰り返すことで、読み手にその商品の良さを印象付けたいと考えたのだと思われる。しかし、同じ内容が形を変えて二つあることで、読み手は混乱してしまう。むしろ、含まれている成分を取ることでどんな効果が表れるのかを説明したり、実際に使用した人の声を入れたりするほうが、読み手にその商品の良さをアピールできると思う。(以下略)

書き手の意図を捉える設問について、C評価からA評価になった生徒bの評価

また、事後アンケートの記述から、評価するために、テキストを対象化して、結び付きを確かめたり書き手の主張や意図を確かめたりしながら読もうとしていたことが伺える。

○今まで適当に読んでいたけど、評価しながら読むといろいろな気付きがあるので、生活の中でも注意して読みたい。
○評価するには、肯定的なものと批判的なことを考えなくてはいけないから、そのためにしっかり読めた。
○評価しようとする、書き手の主張や意図をしっかりと考えて捉えることができた。

事後アンケートの記述

これらのことから、実生活で触れるテキストを評価する学習指導や手立ては、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付ける能力を育む上で有効であるといえる。

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

実生活で触れるテキストを評価する学習活動を行うことは、連続型テキストと非連続型テキストとを関連付ける能力を育むことに有効であることが明らかになった。

2 今後の課題

研究授業の結果分析から明らかになった課題に基づいて、連続型テキストと非連続型テキストの内容の大体を読み取るスキルの習熟を更に図り、自力で読むことができるようになるまで指導を継続する。

【注】

- (1) 森田信義(平成23年):『「評価読み」による説明的文章の教育』溪水社 p.23に詳しい。
- (2) 井上尚美(2007):『思考力育成への方略ーメタ認知・自己学習・言語論理ー(増補新版)』明治図書出版 pp.93-94に詳しい。
- (3) 阿部昇(2003):『文章吟味力を鍛えるー教科書・メディア・総合の吟味』明治図書出版 p.66に詳しい。
- (4) 各実践については、高木展郎監修、三浦修一・「読解力」向上カリキュラム研究会編著(2007):『「読解力」をはぐくむ国語学習ー探究する学び、発信する学びをめざしてー』三省堂 pp.36-59に詳しい。
- (5) 金子守(2013):「身の回りの『非連続型テキスト』を活用する」『月刊国語教育研究No.500』p.21に詳しい。
- (6) 井上尚美(2007):前掲書(2)p.129,p.201に詳しい。

【引用文献】

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成24年):『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取り組みが期待される内容のまとめ(中学校編)』教育出版 p.22
- 2) 文部科学省(平成17年):「PISA調査(読解力)結果等に関する参考資料」『「読解力」向上に関する指導資料』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/007.htm
- 3) 文部科学省(平成17年):前掲2)に同じ
- 4) 文部科学省(平成22年):『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版 p.58
- 5) 森田信義(平成23年):『「評価読み」による説明的文章の教育』溪水社 p.23
- 6) 井上尚美(2007):『思考力育成への方略ーメタ認知・自己学習・言語論理ー(増補新版)』明治図書出版 p.59
- 7) 井上尚美(2007):前掲書 p.59